広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	更新する記憶と平和観 ： 被爆者調査から
Author(s)	ファン　デル　ドゥース，ルリ
Citation	ぷらくしす ， 23 ： 79 - 95
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52234
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052234
Right	
Relation	

更新する記憶と平和観 ~ 被爆者調査から

ファン デル ドゥース ルリ（広島大学平和センター）

「記憶する」とは、「過去」の事象や経験を心に記録し、後にそれらを想起しながら、その時点の視点で語ることを可能にせしめる行為を示すが、実はそれだけに留まらない。本稿では、むしろ「記憶」が現代と未来の創生に関わるレファレンスポイントでありつつ、常に更新する思考の枠組みでもあるとして、実証研究の事例を挙げながら、社会精神的な機能とプロセスの面から考察したい。

記憶と歴史の違い

「記憶」とは何か。私達は「記憶」ということばをどのような意味で使っているのだろうか。昨今、「歴史」のことを「記憶」と言い換える風潮があるが、記憶と歴史を同一視してよいものだろうか。

まず、言葉の意味から紐解いてみたい。ケンブリッジ大学出版の英語教育辞書[1]の説明によると、「memory（記憶）」とは、①情報や経験、人々について覚える能力。②過去について覚えていること。③コンピューターで、情報やプログラムが、永久または一時的に保存されている部分、もしくは情報を保存するために必要な空き容量、とされる。つまり、「記憶」とは、特定の情報を保つための、能力や機能、状態、空間または場所とその内容である。これらは流動的なものである。他方、「history（歴史）」とは、①過去のできごと、②過去の事象の学問と定義されており、「過去のイベント」自体が、考察の中核にある。「歴史」は過去をまなざしている。「記憶」は、現時点で、または未来において、過去や経験にどう向き合うのか、が考察の中核である。記憶は、私たちの行動や、能力や機能、状態やプロセス、空間や場所において、過去を含む情報をどう扱うか、に着目するものである。以上から、「歴史」と「記憶」は関連性が深いが、同義語では全くない。たとえば、「記憶学」とは「歴史学」という学問と相互補填的に発展するもので、過去の事柄や経験を情報として用いるための、「能力、機能、状態、プロセス、空間、場所」を探究するために異分野協働的な研究が求められる。

さらに、記憶と密接な概念をみてみたい。「Recollection（想起）」は、「何かの記憶」と定義されており、「recollect（思い出す）」は、何かを「remember （思い出す）」ことと定義

される。そして、「memorize（記憶する）」は、①何かを正にその通りに記憶に保存すること、②何かを忘れないで行うことである。それに対して「remember（思い出す）」は、①情報を脳裏に取り戻す、または記憶に保存するのが可能であること、②何かを忘れずに行うこと、と定義されている。このように、memory, remember, recollect,など、意味が相互依存しているが、現時点における何らかの「action（活動）」が概念の中核部分にあるため、どれも history（歴史）とは異なると言える。

以上から、「現時点での精神社会的活動」としての「記憶」について、本稿での考察を進めていきたい。世界初の人間に対する核兵器使用の「歴史」にまつわる 76 年間の「記憶」について、被爆者全国調査の分析結果を検証する。そして、記憶とは社会に敏感であり、常に更新しながら（もしくは何らかの理由で更新を拒みながら）、現在を創出する生き物であること、そして視点に左右されながら、未来を創生していく社会生活の原動力であることを議論し、更新する記録・記憶を援用した継承について考察する。

被爆の実相・記憶の継承

広島・長崎といえば、キノコ雲の写真を連想することが多い（図１）。もしくは、世界遺産の原爆ドームや平和の像かもしれない。基本情報として、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島市街の上空にウラン型原子爆弾が投下されたこと、そして 8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎（浦上地区）の上空にプルトニウム型原子爆弾が投下されたこと、を知っている人もあろう。このような情報は、「時と行為と場所」がはっきりしており、歴史に記録された「史実」として、共有することができる[2]。しかし、その「記録された史実」をどう、覚え用いて行動するかは、千差万別であり、個人の「記憶」次第である。

図１：広島市の上空に発生したきのこ雲[3]

記録と記憶は、視点に左右される。例えば、「広島・長崎」は町と市民を示す。しかし、「キノコ雲」のイメージを使って「広島への原子爆弾投下」や「長崎への原子爆弾投下」による町と市民への影響を説明するのは難しい。この画像を見る人は、広島の町や市民ではなく、「原子爆弾の威力」を見ているからである。それにも関わらず、キノコ雲を見て、「広島・長崎への原子爆弾投下」について知識を得たような気になるのは、見る人の視点・興味が「原子爆弾の威力」にひかれているからである。私たちは、歴史上の情報からそのように興味深い部分を抽出して覚え、自分の記憶として蓄える。さらに言えば、写真のもくもくと立ち上がる雲は、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分に原子爆弾が投下された結果の一部に過ぎない。しかも視点は、雲の上から「投下」を示す視点に限られている。では、視点を画像の下方に移してみると、この雲の下の影に、当時の広島市がうっすらと浮かぶ。そこには、人々の生活、時間と行為があった。例えば、この画像に、「あの日は月曜日、出勤途中だった」という記録が添えられていたらどうだろうか。出勤していくひとびとの影が思い浮かぶかもしれない。その連想は、私たちの「想像（imaginary）」を惹起し、「ポストメモリー（post-memory）」を導く可能性を秘めている[4]。ポストメモリーは、直接的体験を基盤とした当事者の記憶を持たない者が、証言や語りなどを介して当事者の記憶に触れ、その追体験を経て擬似的な記憶を持ち、記憶を継承する役割を担う動機づけとなる。その際、社会的弱者や、

政治社会的抑圧を受ける集団の記憶[5]を継承することに、倫理的価値を見出す場合もある。

他方、記録は特定の時間的枠組みにおいて、行為の事実関係の究明を可能にするが、記録物自体が倫理性を判断するものではない。記録を解釈・記憶する時点で、倫理性の議論が発生する場合がある。記録上、「出勤」という行為と、「原爆投下」の行為が同時刻に発生した結果は、この図（2）のような瀕死の罹災者である。即死者に加え、14 万人が被爆から 3 ヶ月弱で亡くなった。ここでは、あの日中学生だった坪井直氏が、罹災した自分を指差している。写真自体は視覚的な記録であるが、坪井氏がこれについて語る時、あの日救えなかった女性の姿が浮かぶという。そして同氏は、それらの記憶によって自ら、被爆の実相を伝える責任を背負った。特殊な爆弾で長期的な被害を受けたという観点から、罹災者の支援法が整備されていく中、原爆を受けた人々は、「被爆者」と呼ばれるようになり、反核運動でも知られるようになった。坪井氏は、中学校教員として、また日本原水爆被害者団体協議会のメンバーとして、被爆者を代表し、代弁するようになった。

図２：坪井直氏と御幸橋西詰の写真

その間、「あの日」の歴史には、キノコ雲の上と下で異なる視点が生まれ、それ以来 76 年間、異なる記憶が展開してきた。原爆投下から 16 時間後のトルーマン宣言は、原子爆弾投下によって戦争が早期終結し、多くの兵士や市民の命がさらに失われずに済んだ、と核兵器使用の正当性を主張した[6]。それに対して、被爆者の坪井直さんは、核兵器廃止運動とそのための平和教育を訴えてきたが、2017 年にオバマ元大統領に面会した時、怒りと憎しみの

記憶が、共通の世界平和への思いに変わっていたという。坪井氏はオバマ大統領の目を見つめながら、「われわれは、未来に行かにゃいけん（we must step forward into the future together）」と訴えかけた[7]。そして、今年 10 月 28 日、96 歳の人生を閉じた。

坪井氏の死は、被爆の実相を語れる被爆者がまた一人亡くなり、貴重な記憶がさらに失われた、と報道された。坪井さんら被爆証言者らは、広島平和記念資料館を中心に、あの日、キノコ雲の下で何がおこったのか、平和の尊さを訴えてきたからである。

広島の場合、爆心地の上空 600 メートルを中心に、100 万度以上の高圧高温度の火球が炸裂し、ガンマ線を放出しながら膨張し、熱線で地上の表面温度は、およそ 3000 度に達した。人や動物を焼き殺し、岩石の表面さえ溶かした。熱線と爆風と衝撃波で建物は吹き飛ばされ、わずか数秒で爆心地から 2 キロ以内は瓦礫と死の灰となった。放射性微粒子は、大気中水分を吸着し、雨滴の核となって原子雲を形成した。これが、放射性物質を含んだ黒い雨となって降り注ぎ、さらなる放射線被害を起こした[8]。

さて、これらは歴史に記録された原爆の威力である。しかし、被爆者が見た「実相」の記憶とは、視点が異なる可能性は否めない。このことを鑑み、広島平和記念資料館では、被災者の衣類や、焼けて表面が泡状になった瓦など「現物」を「現場」で展示し「現実」に触れてもらうことが、「いのちの証」であり、実相を知る手がかりと捉えている。その際、展示を担当する学芸員は、被爆当事者の思いを察する「まなざし」で、時系列や場所など関連資料を展示しつつ、説明を被爆地など最小限に押さえて、現物に語らせる。来館者が現物を見て被爆当事者の経験に思いを馳せ、自分に引き付けて考えられるように展示を工夫している。

もちろん、すべての来館者は同じ展示を見るわけであるが、各自が見ている物、つまり、注意をひく部分は異なり、同じように被爆証言者の話を聞く時も、同じ証言を聞いても、各自が聞きたい、聞こうとする、被爆の実相の記憶は異なる。被爆体験証言者も、当時まだ子供だった人が認識した実相と、その後 76 年の人生経験を経て理解を深めた実相は、同じではない。記憶は、情報や人生経験や新たに発見された被爆の事実によって深められ、改められ、更新されるのであり、被爆体験の記憶は、当事者が生きている限り現在進行形であり常時更新中なのである。それについて知る側も、多様な記憶を受け止め、自分の認識範疇で更新している。従って、「歴史」は、史実を証拠資料に照合しながら、検証し、記述・記録し、そこには客観性が求められ、まなざしは過去に置かれる。他方、「記録」は、事柄を書き記す行為そのものである。また、「記憶」は、事象を個人の認識範疇で想起する行為とその内容である。記憶には自分なりの物語性があり、主観と客観が混在している。まなざしは、現時点に置かれ、過去の事象をどう扱うかが関心事である。

記憶が現在の創出である由縁はここにある、と筆者は考える。では、客観的に「歴史」を学び、その検証のために「記録」を残すことが重要であって、主観性の絡む「記憶」は継承しなくてもいいのだろうか。

オバマ元大統領が花輪を手向けた広島平和記念公園の慰霊碑には、「安らかにお眠りください。あやまちは2度と繰り返しませんから」とある。被爆の実相と記憶を継承し、各自が自分のこととして捉え、核兵器が2度と人類殺戮に用いさせないという決意である[9]。この、「あやまち」という記憶の認識について、ジョージ・サンタヤナは、「過去を記憶しない者は、同じ過ちを繰り返す」（1905）と言いた。記録が一般化される反面、記憶は当事者化するからである。

例えば、「被爆の実相」には、個人記憶と集合記憶の双方が含まれる。前者は、経験した当事者に特有の記憶で、社会情勢などの影響を受けて変化する場合もある。他方、後者は、個々人の記憶を取り込んで一般化し、社会の象徴的な事柄が絡み、特定グループに受け入れられ、共有される記憶である。例えば、被爆者にとっての「被爆の実相」を、「ヒロシマの被爆体験」と平和宣言で表現するとき、あたかも「広島市民が共有している記憶」であるかのような印象を与えるのである。このように、個人記憶と集合記憶は対立するものではなく、個人から集団へ統合されたり、集団から離脱して個人に特有化される連続的且つ相互的なプロセスを意味する。

これについて、エミール・デュルケムは、個人の意識が集合体となったものが「社会」なのではない、述べている[10]。「社会」は、個人の心理や行動に還元されるものではなく、それ自体が一つの実在だと言う。社会の集合意識が個人を動かす、という考えかたである。モーリス・アルヴァックスは、ヒトの記憶は多くが集合的であり、社会的な相互作用を軸にして記憶が構築されると考える[11]。その記憶に基づいて「歴史解釈」が構築され、集合的な記憶は社会を動かし、社会の中の個人を動かすという記憶のサイクルが生まれる。つまり、社会が社会として確立するために必要なものは、①過去から現在、未来へと続く時間的概念上の継続性、②個体間の「つながり」であり、③そのつながりは連帯・全体性を持つことである。社会的記憶が、過去から現在へ、そして未来へと繋がっていくことで、社会が自律的に創生されていきる。

以上から、時代を超えてつながり、社会において自己の役割と存在価値を確保する、「居場所」を確認し、いのちを存続させるために、環境に合わせて記憶が更新されるものだと筆者は考える。実際、アイリングワースによると、過去を回想できない記憶喪失症患者は、将来計画を立てるのが困難だといえる[12]。つまり、記憶は、自己と社会を存続させる現在の創出と、未来創生のために、必須なのである。

では、記憶はどのように更新されるのだろうか。原爆投下を指揮し、「人命を救うための原爆投下という正当性」を訴えたハリー・S・トルーマン氏の孫、クリフトン・トルーマン・ダニエル氏は、2012 年広島・長崎を訪れ、現地での出会いと実相を知って理解することで、自分の視点が動き、原爆投下にまつわる記憶が変化したと述べている[13]。このように、記憶は変化し続け、成熟するのである。

1986 年、被爆者を対象とした大規模アンケートへの回答者のことばに、次のような記述がある。「広島の川はちょうど干潮時で、人々は皆川の中に逃げていたが潮が満ちて引き潮のときに死体が流されるおそれがあるということで、白島付近を中心に川の中を妻を探したが見つからず、夜の 12 時過ぎあきらめてつかれた体を半焼で残った中島の叔父の家まで帰ったが、ここも妻の消息はなく、何と両親に辨解しようかと悲嘆にくれたのを覚えている」。この回答者は当時 21 才で、内容は避難と捜索の道のりや被災地の様子、義理の両親への配慮など詳細に渡っている。その反面、当時 4 才だった回答者は、語れる記憶がないと言う。さらにもう一人、当時 4 才だった回答者は、「今現在の母親のケロイドをみるに耐えない。」と、あの日の記憶でなく、アンケート直近の記憶を語っている。このように、被爆当時の年齢によって歴然とした違いがあることは、記憶は成熟度によって異なり、人が成熟するにつれて、記憶も成熟することを示唆している。

原爆投下の物理的記録も経時的に変化する。新たな物理的事実の発見によって、投下地点が 560 メートル、580 メートル、600 メートルと変わってきた。放射線の身体的影響や遺伝子異常も未だ全貌が解明されておらず、新しい医学的知見が得られ、記録されてきた。原爆がなぜ広島・長崎に投下されたのかなど、歴史、社会政治的事実も発見が続いている。それら新事実の記録は、資料館の展示にも、実相の記憶を語る被爆証言にも反映されるのである。**即ち、記録の更新**は、**記憶の更新**につながり、その時点における経験に対する**当事者のまなざしも更新されるのである**。

人生の出来事の記録の更新は、当事者にとって、出来事の原因と思われる事件（この場合は原爆投下）にまつわる記憶の更新にもつながろう。NHK のウェブサイト、原爆の記憶　ヒロシマ・ナガサキに掲載された、宮崎県在住、匿名の方の「忘れられない記憶」は、その一例である[14]。

- 小学生で白内障にかかって、わずかであるが視力は低下していった。
- 中学校頃まで鼻からの出血はよくあった。
- 20 代の後半に甲状腺機能障害と診断され、白内障もかなり進行しているため、進行を遅らせる治療と甲状腺治療をする。

- 30 代に入り白血球数が急激に下がり始め、検査をしても原因不明、数年の治療をする。
- 30 代から 40 代まで卵巣腫瘍手術後、原因不明にて腹痛検査をするもレントゲンでも原因がわからない。痛み止めも効かず緊急開腹手術、十二指腸潰瘍とわかる。
- 後に腸閉塞手術、卵巣膿種手術と 10 年の間に 4 度の手術を受け、
- 50 代に入って 2 年目にまた下腹部に激痛、これも原因不明で手術。（中略）」

このように、一人の被爆者が経時的な健康被害について述べている。様々な症状に苦しみながら人生を送り、新たな健康上の問題が浮上する都度、原爆体験の記憶が複雑に深まり、成熟していく様子が顕著な、記憶の更新の例である。

逆に、何らかの理由で記憶が映画のスチルのように脳裏に焼き付けられ、止まったままになることもある。森冨茂雄さんは、爆心地から 3 キロメートル離れた広島の己斐で学徒動員中に被爆し、投下数時間後、爆心地からわずか 70 メートルの場所にあった自宅を目指して、火の海の中を歩いて帰った。途中で見た燃えさかる電車と乗客や黒い雨を、誰にも語ることはなかったが、50 年以上を経てようやく鉛筆画に描き始めた。思い出したくない壮絶な光景や死の感覚が、フラッシュバックのように突然、森冨さんを苛んできたので、長い間それについて話すことも、描くこともできなかったが、ある時から脳裏の光景を書かずにはいられなくなった。また、避難のルート・捜索のルートを証言と共に描いている。土橋・天満町界隈では、重症を負った女学生たちに出会ったと記されている[15]。

それとは別に、平和記念資料館には、森脇瑤子さんという女学生の焼け焦げた制服の遺品があった。瑤子さんは、学徒動員で土橋方面に行くと前日の日記に書いていた[16]。これらを統合した時、森冨さんが出会った重症の女学生達の一人は、森脇さんだったであろうことがわかり、遺族は空白だった娘さんの**最後の日の記憶を回復**。片や森冨さんは、**あの日の女学生の記憶が深まった**。このように、**更新する記録が出会う**ことで関係者の記憶が深まり、更新し、さらに**記録と記憶の更新のサイクル**が広がっている。

森冨さんが子ども時代を過ごした界隈は、現在の平和公園のあたりで「中島」という地区だった。平和公園は、被爆前 3 千世帯以上が住む町だった。これらの街の名前は平和公園の盛土の下に消え去ったが、被爆で消失した広島・長崎では、当時の様子を記す写真がなく、長い間「中島地区の記憶」は、埋もれていたが、森冨さんが被爆 50 年ごろから描き始め、すべてが記憶だけを頼りに 46 点のスケッチを完成させ、漸く当時のくらしの様子を知るきっかけが生まれた。これらの絵と証言は、2011 年から制作を始めたアニメ映画「この世界の（さらにいくつもの）片隅に」という映画のシーン作成の際に、参考にされた。さらに、この映画が大ヒットし、当時の様子を知る勉強会が広がり、疎開で焼けなかった古い写真が見つかった。比較すると、被爆者森冨さんが記憶に頼って書いた絵は、当

時の写真と合致した。証言からも推測できるように、森冨さんのエピソード記憶は、非常に鮮明であった。

ではなぜ、記憶の中にしか残っていない街の絵を森冨さんは、描いたのだろうか。森冨さんは、次のように答えている。

- **誰に見せるというあてがあったわけじゃないが、描いておけば誰かが見るだろう**と思って描いた。」

これは重要な点である。記録を残せばいつか、誰かが見る、そして自分ごととして、その人なりに記憶を繋いでくれるという願いが込められている。

実際、森冨さんが残した絵をもとに、16–18 才の高校生たちとその指導教員が CG を用いた自費制作で、森冨さん宅界隈を蘇らせた。図 3 にある左端の美しい洋風建築は、チェコ人建築家ヤンレツェルの傑作、産業奨励館で、後に原爆ドームとなる。高校生がそこにあった生活の「いのちの記憶」を現代に生み出したのである。2019 年の夏、親兄弟を失って孤児になった森冨さんは、あの日から 2 度とみることのできなかった我が家を、目を細めて見つめていた。若い世代に記憶を繋ぎ、森冨さんは先月 11 日に他界された。

図 4　森冨さん自宅界隈の CG (2020-21 福山工業高等学校計算技術研究部作成)

森冨さんの燃える電車の絵にもあったように、被爆の記憶は、トラウマや PTSD 様の症状を引き起こしうる。特に燃える電車は被爆者が描いた絵や証言に頻繁に現れており、ト

ラウマのトリガーとなっている可能性が伺える。被爆した２台の車両６５１号と６５２号は、今日まだなお街を走っている。被爆者は記憶の中でこれにどう対処しているのか。何十年を経て、記憶の更新はあったのか。更新が何をもたらしたのか、全国被爆者アンケート調査から分析してみた[17]。

1985 年の日本被団協調査委員会調査と朝日新聞・広島大学・長崎大学共同被爆 60 年アンケートで、全国の被爆者のうちおよそ 13000 名から回答を得た。そのうち、1986 年は 8268 件、2005 年は 6671 件で、合計 14869 件の自由記述の回答を計量テキスト分析し、さらに談話分析を行った結果に基づく考察を一部紹介する。

PTSD 症状には、①再体験症状、②回避・精神麻痺症状、③過覚醒症状などがあり、これらの症状を示す言語表現が被爆者アンケートに頻出している。

特に、避難と救助に用いた乗り物は、トラウマを示す表現とともに頻出し、証言で想起されてきた。証言中の移動・交通機関と手段に言及する文書数と出現頻度を調べると、1985 年と 2005 年のどちらでも、電車・市電や汽車・列車・鉄道、トラック、船、第八車、リヤカーなどが上位に入っている[18]。文中にある乗り物が、被爆時の移動手段として、特定の光景や経験を想起させるトリガーとなっていることを示唆している。

自由解答に現れた　乗り物の表現

語	文書数	割合(%)	語	文書数	割合(%)
電車・市電	450	5.443%	汽車・列車・鉄道	325	4.872%
汽車・列車・鉄道	366	4.427%	電車・市電	284	4.257%
トラック	290	3.507%	トラック	202	3.028%
船/舟	174	2.104%	船・舟	102	1.529%
大八車	80	0.968%	車	81	1.214%
リヤカー	61	0.738%	自転車	29	0.435%
自転車	60	0.726%	リヤカー	28	0.420%
自動車	31	0.375%	自動車	23	0.345%
バス	23	0.278%	大八車	41	0.615%
上記合計	1535	18.566%	上記合計	1115	16.714%
内、重複	229	2.770%	内、重複	200	2.998%
1985年　計	1306	15.796%	2005年　計	915	13.716%

表１：自由解答に現れた乗り物の表現 1985 年・2005 年アンケート調査から

例えば、「死人をリヤカーに乗せ、死人のゴロゴロしている所を引っ張られてる様子が目

に浮かぶ」、「その亡くなった人たちの姿は忘れられない～舟がひっくりかえった時、おぼれて亡くなってしまったのが心残りで」と記されている。

このような連想を、ニューラルネットワークの一種である自己組織化マップ（Self-organizing map: SOM）を用いて分析した結果、先述の記者・船・大八車・リヤカー・市電・列車・鉄道・電車・トラックなどが頻出しており、8つのクラスターに分かれて概念を形成していた。「電車」は「戦争」と「あの日の惨状」を想起させることが判明している[19]。例として、

…いまでもはっきり思い出される。生き地獄の様相は決して忘れられない。比治山橋を渡り、電車通りへ出ましたところ、向うに家屋が燃えて居るのが見えました。逃げる道すがら、父親
…思い出し心に残って消えません。　駅の構内からやっと脱け出した駅前の惨状。電車は押しつぶされ、歩行者は皆叩きつけられ焼茄子を転がしたように路面に散乱し、目に…
…光景を今でもはっきり思い出される。戦争程ヒサンな事はないと思います。電車の中で多くの人が黒ごげに（男女の性別もわからない）なって折り重なって死んで…

表 2：「電車」に言及した例。

図 5：1985 年結果

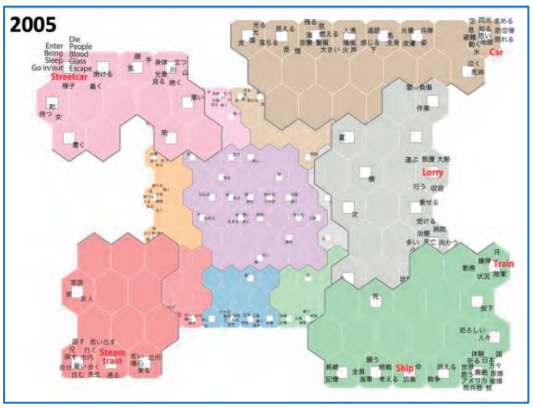

図 6：2005 年結果

マップを見ると、「電車」が布置されたノードは、「避難」と対角の位置にあり、「惨状」の概念との類似性を示している。また、「電車」と「トラック」のクラスターは「人間、見る、焼く、残る、死体、並べる、負傷、運ぶ、生き地獄、死者、山」等の語群から被爆の実相の概念ネットワークを形成している。1985 年調査においては、「電車、汽車、トラック、大八車」等の移動手段が、被爆体験を直接想起させる概念ネットワークを形成している。

2005 年調査の分析では、

- 上部に「電車」と「車」のクラスター

- 「トラック」のクラスター、
- 下部には「列車」「船」「汽車」のクラスターが出現している。

しかし、表現の多様性と直接・残虐性が希釈され、統一された婉曲表現へと集約される傾向が顕著である。1985 年では、「電車、市電」、「汽車、列車、鉄道」、「船、舟」、「大八車、リヤカー」など多彩な乗り物の表現がみられるが、

- 2005 年では、「電車、汽車、船、車」に集約され、それ以外は、件数が非常に少ないためマップ上に表れないほどだった。

20 年を経て記憶の集合化が進み、個々の叙述表現の詳細な差異が、共有しやすい一般的表現に集約されてきたことを示唆している。これも「記憶の更新」の例である。さらに、

- 「死ぬ、人、血、ガラス、逃げる」という語群が電車と被災の記憶の結びつきを示し、
- 1985 年と比べて、身体・物質的被害を直接的で凄惨な表現ではなく婉曲的になり、
- 「入れる、居る、寝る、出る」という静的な動詞群は、「電車」と被爆の結びつきが、**写真のスチルのように切り取られた瞬間の想起（静的な記憶）に変化**したことを示す。

さて、変化の背景には、2005 年 8 月 6 日、被爆電車の廃車計画のニュースがあった。「合理化の波にも耐え抜いた最後の生き証人」を失うことで「歴史の記憶も風化する」ことを懸念した市民運動に押されて、広島電鉄は車両の保存に踏み切った[20]。おかげで 2021 年現在、被爆電車として運行中。その後、電車は、「生き残る」、「死を乗り越える」ことのシンボルとなったという。広島電鉄の社史によると、

- 当時「ニューフェース」だった車両。原爆により「全身を閃光にさらした。乗客も窓ガラスも吹き飛ばされた」にもかかわらず、「死屍が累々と重なる焼け野原で、車体だけはしぶとく生き残った」[21]（広島電鉄 2012: 9）。

「電車」はトラウマの記憶の引き金であり続けながら、「生き残った、生き抜いた」経験と記憶がトラウマに塗り重ねられることで、特殊な被爆体験における「記憶の環境」を構成する重要な要素となっている。そこで、記憶の場で体感する当事者性について考えると、「電車」のように、「現場」や「現物」も、被爆体験の想起のトリガーになるのだろうか。当事者でなくとも、想起を介した擬似体験は可能だろうか。そこで次に、広島平和記念公園内の資料館を訪れる観光者が、現場で現物を見て被爆の実相に触れた時、どんなコメントを発信しているのかをトリップアドバイザーの口コミで調べた[22]。

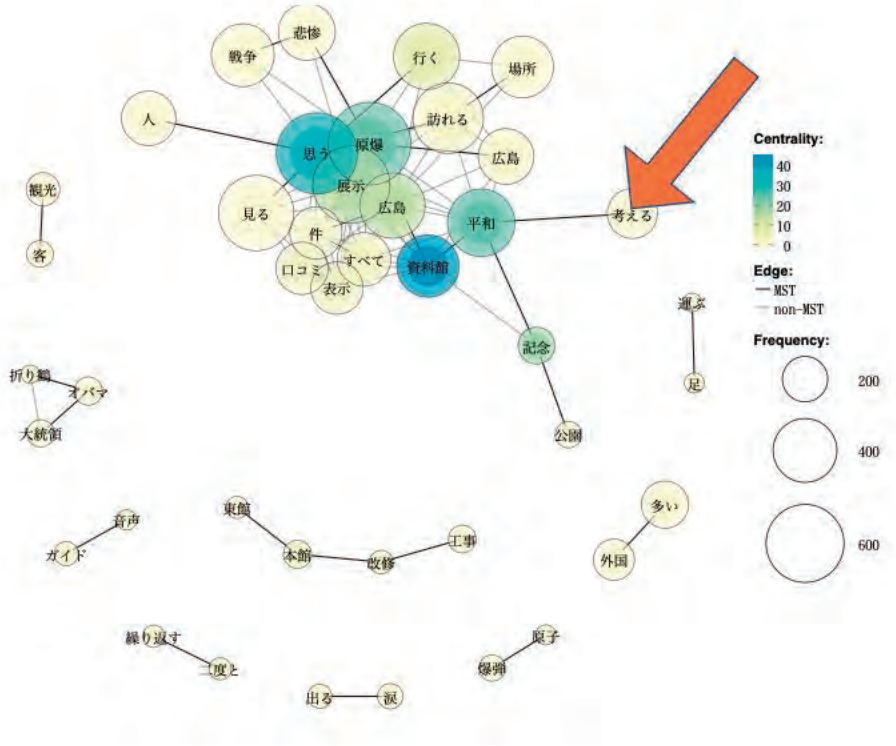

図 7：訪問者は、「平和」を「考える」

計量テキスト分析の結果から、訪問者は平和記念資料館の印象を、「平和」について「考える」ということばで表している。特に、博物館では「見る」「知る」「思う」など認知表現の頻出が顕著であるが、資料館の訪問者の特徴として、「考えさせる」という表現が突出している。ロコミ内容は、現地で、実証された現物に出会う体験をしたことで、自分の視点に変化があったというものである。さらに、被爆の実相が、自分ごととして迫ってくる感覚を経て、自分の行動が変わる、というものだった。これらをまとめると、次のような記憶の段階的変化が見えてくる。

Step1 資料館自体の機能的特徴に関する語（「原爆」や「展示」など）以外では、「平和」、「思う」という語の頻度が高い。

→観光者が、「こころ」で反応

Step 2 「資料館」を「記憶の場所」としてとらえ、そこで原爆について「知る」、「考える」、または「気持ち」を「訴える」と表現している。

→記憶との出会いを体感・平和教育

Step 3 展示を見て、「考えさせ」られた。

→原爆・被爆体験に思いを馳せる→まなざしの歩み寄り

Step 4 「平和」を「尊い」と表している。

→普遍的な平和を希求する　使命　自発的継承行動

結論として、子どもだった被爆者の視点を思い起こすことにより、擬似「原爆体験」から、自発的に被爆の実相とそれに対する自分の新たな現場の記憶をインターネットで発信する、という自発的な継承行動へ向かうことが明らかにされた。過去の歴史を知ることで、現在の記憶が展開し、未来の行動を創出していく、良い例である。

続いて、被爆者の体験証言が、記憶として継承されるのかを、被爆者と学生のアンケート調査結果で考察する。2020 年の広大平和センターと読売新聞社の共同調査では、被爆者調査で 1640 件の有効回答[23]、学生調査では 401 件の有効回答を得られた[24]。まず、被爆者調査で「被爆者が次世代に望むこと」を尋ねると、「広島・長崎に足を運び、被爆の実相を学んでほしい」が最も多く回答者の 57.6%、次に多い 49.4%は、「被爆者の証言を聞いてほしい」、そして「書籍や被爆者の手記などで被爆の実相を知ってほしい」が 46.4%、と続いた。どれも記憶の継承である。また、「次世代に伝えたい核の恐怖」とは、威力や自分の障害よりも「人類絶滅の可能性」という、より普遍的な記憶である。さらに、「被爆者として人生で最も苦しかったこと」の例は、「被爆による病気や傷跡」、「身内の死の苦しみ」、「被爆時の記憶、トラウマ」が上位だった。つまり、現時点の被爆者の抱える記憶とは、被爆時の苦しみやトラウマを鮮やかに抱きつつ、自己のことよりも人類を核の恐怖から守り、より普遍的な平和を希むことを伝えたいという傾向が顕著である。そのために被爆の実相を知ってもらいたい」という記憶へと更新してきたことがわかる。

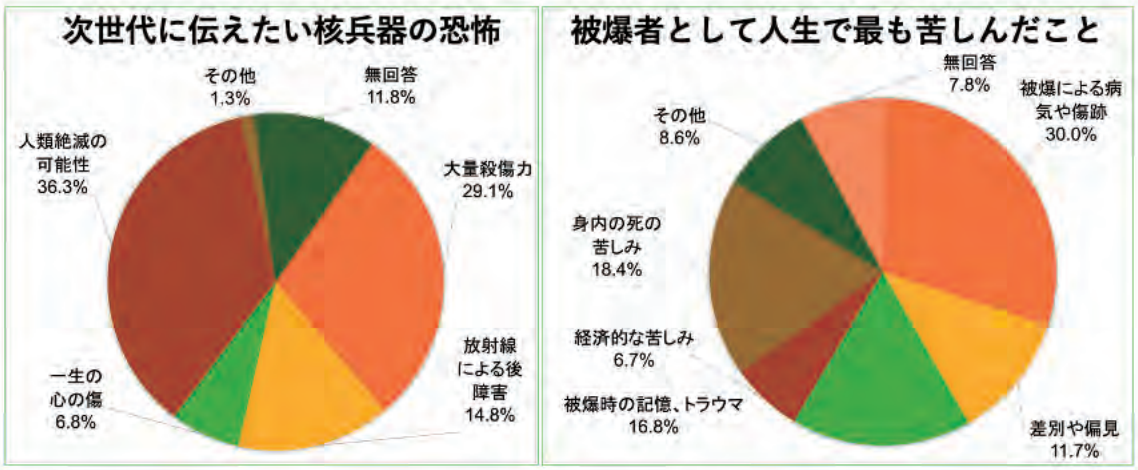

図 8：被爆者調査

これに対し、学生調査では、被爆者に聞きたいことは「何をみたか（被爆の実相）」、「米国に恨みがあるか」、「苦しみが現在も継続しているか」、「どんな苦しみがあるか」などである。これらは、悲惨な体験を強いられた被爆者の思いを、自分の認識の範疇で想起している。

学生が興味を抱いている被爆者の記憶とは、個人記憶からより普遍的な平和の希求へと、被爆者の記憶が更新する以前のものを想定しているようである。ところが、実際に被爆者の証言を聞き、資料館の展示を見ると、学生も、トリップアドバイザーの口コミの分析結果のように、**更新を経てきた被爆者の記憶**にふれて、被爆の実相を当事者感覚で受けとめ、平和を考え、伝える行動を起こす傾向がみられている。その際、受け手側の記憶も更新しているわけである。

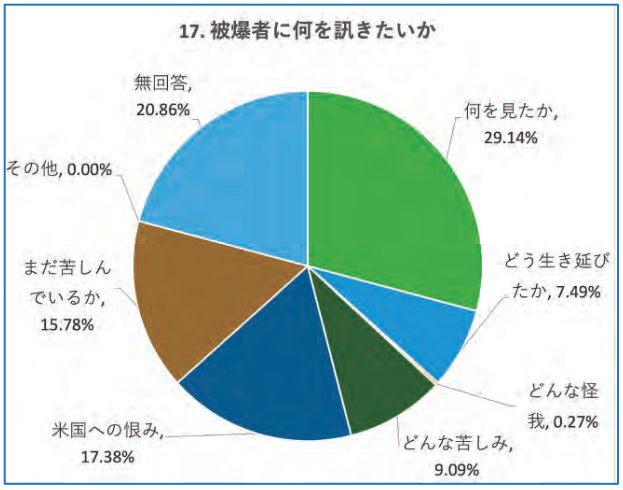

図９:学生調査

以上の様に、「記憶」を「プロセス」として捉えることにより、現在を創出し、未来の息吹となる「記憶」の特性と可能性が明らかになった。それを踏まえて、次世代へ 自分のこととして　考える記憶を　託す　ためには、

- 記録・記憶の更新を止めない。
- 時間軸の一点ではなく、「被爆前、被爆直後、今日まで、生きてきた記憶」として継続する時空の上に記憶を捉える。
- 現物・事実の記録－検証のよりどころを記録し、残す。
- 検証した事実をフィードバックしながら、
- 記憶のネットワークを構築し、記録または記憶された事象間の相互検証で、新事実を拾い上げていく、そして
- 以上をサイクルとして構築すること、

が重要である（van der Does 2021）。

注

[1] https://dictionary.cambridge.org/　Accessed 5 December 2021.

[2] Schulz-Forberg, H. (2013 :53-54). The spatial and temporal layers of global history: a reflection on global conceptual history through expanding Reinhart Koselleck's Zeitschichten into global spaces. *Historical Social Research*, *38*(3), 40-58

[3] 広島平和記念資料館所蔵「米軍機より撮影したきのこ雲」、1945 年 8 月 6 日、原子爆弾が広島市に投下された後、松山市上空から撮影された写真。

[4] Hirsch, M. (2012). The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust (Gender and Culture). Columbia University Press.

[5] 例えばハーシュの研究では、ホロコースト。

[6] The White House, Washington. D.C. (1945). 'Statement by the President of the United State', Harry S. Truman Library, 'Army press notes', box4, Papers of Eben A. Ayers.

[7] 被団協の坪井さん死去「核なき世界」を諦めない

[8] 広島市ホームページ「原爆被害の概要」. https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/9399.html. Accessed 5 December 2021.

[9] 広島市ホームページ「よくある質問と回答」. https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/faq/9398.html. Accessed 5 December 2021.

[10] Durkheim, Émile, Sociologie et philosophie. Paris, PUF, 1974, p. 79.

[11] Halbwachs M.. *Les cadres sociaux de la mémoire.* Paris : Félix Alcan, 1925

[12] Illingworth, S. (2016) Lesions in the Landscape. https://artdesign.unsw.edu.au/unsw-galleries/shona-illingworth-lesions-in-the-landscape. Accessed 5 December 2021

[13] 朝日新聞デジタル　(2016). 心打たれた２人　原爆投下決断したトルーマン氏の孫ら https://www.asahi.com/articles/ASJ5W35VKJ5WUHBI00M.html　2016 年 5 月 28 日掲載.

[14] NHK. 戦争証言アーカイブス「原爆の記憶ヒロシマ・ナガサキ」. https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/no-more-hibakusha/ Accessed 5 December 2021

[15] 森冨茂雄 (2011). 「消えた町、記憶をたどり」ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会.

[16] 森脇瑤子（1945/1996）「広島第一県女一年六組森脇瑤子の日記」. 平和文化.

[17] ファンデルドゥース　ルリ、川野徳幸（2019）「『乗り物」を介した被爆体験の想起とトラウマの実証的考察」、広島平和科学 41. Pp.13-31.

[18] 表 1 を参照。

[19] 表 4 と 5 を参照。

[20] 堀川恵子・小笠原信之（2005）　「チンチン電車と女学生」 10-11.

[21] 広島電鉄（2012）9

[22] van der Does, L. and Kawano N. (2019). 'Online tourist reviews and accidental conveyors of memories of the atomic bomb', Journal of Tourism and Cultural Change 18/5.

[23] ファンデルドゥースルリ、川野徳幸（2021）なぜ、被爆者は証言するのか―被爆 75 年アンケート調査結果を用いた数理モデル構築の試み―, 広島平和科学, 42 巻, pp. 123-143

参考文献

Durkheim, É. (1974). Sociologie et philosophie. Paris, PUF

Halbwachs M.. *Les cadres sociaux de la mémoire.* Paris : Félix Alcan, 1925

Hirsch, M. (2012). The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust (Gender and Culture). Columbia University Press

Illingworth, S. (2016) Lesions in the Landscape. https://artdesign.unsw.edu.au/unsw-galleries/shona-illingworth-lesions-in-the-landscape

Schulz-Forberg, H. (2013). The spatial and temporal layers of global history: a reflection on global conceptual history through expanding Reinhart Koselleck's Zeitschichten into global spaces. *Historical Social Research*, 38(3), 40-58.

The White House, Washington. D.C. (1945). 'Statement by the President of the United State', Harry S. Truman Library, 'Army press notes', box4, Papers of Eben A. Ayers.

van der Does, L. and Kawano N. (2019). 'Online tourist reviews and accidental conveyors of memories of the atomic bomb', Journal of Tourism and Cultural Change 18/5.

ファンデルドゥース　ルリ、川野徳幸（2019）「『乗り物」を介した被爆体験の想起とトラウマの実証的考察」、広島平和科学 41. pp.13-31.

森冨茂雄（2011）「消えた町、記憶をたどり」ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会.

堀川恵子・小笠原信之（2005）　「チンチン電車と女学生」、日本評論社.

ファンデルドゥースルリ、川野徳幸（2021）被爆体験継承の可能性を探る一「被爆 75 年学生平和意識調査」の多領域横断型研究一, 広島平和科学, 42 巻, pp. 145-173

ファンデルドゥースルリ、川野徳幸（2021）なぜ、被爆者は証言するのか一被爆 75 年アンケート調査結果を用いた数理モデル構築の試み一, 広島平和科学, 42 巻, pp. 123-143